
さまざまな偶然と必然

空気な男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さまざまな偶然と必然

【Nコード】

N7037Q

【作者名】

空気な男

【あらすじ】

雄一と康由紀の一日。平凡という名の偶然、世界という存在の必然。

電話の呼び出し音とともに目覚めたが、実はそれは携帯のアラーム機能だった。

自分を起こしに来る幼馴染は、もちろん居なかった。

部屋の扉を開けると、見知らぬ世界に行く事もない。隣の部屋にいる身内は、妹の朝美^{あさみ}だったが、まだ3歳児であり、両親と一緒に寝ている。

朝食を食べて、制服に着替える。朱色の学生服は全国でも珍しいだろうが、もちろんこの学区においては見慣れた光景だ。近所のおじさんおばさんたちがいぶかしげな目をすることもない。

必要なものを持ち、学校に向かう。遅刻することもなく足取りはゆるやかだ。左の道へ向ったら、誰も居なかった。

学校へ向う途中、見知らぬ少女が倒れている。制服をみるとどうやら同じ学校の生徒らしい。僕は

「あー、すみません。なんか人が倒れているんですけど…」

119番をかけて、とりあえず学校へ向った。

校門が見えてきた頃、なぜか母親の貴代子^{きよこ}から電話がかかってきた。

「うん」

「わかった」

「そう」

何気ないことだった。これといって驚く話もない。

校門にやってきた。

「本物の雄一^{ゆういち}ならば言えるはずだ。朝の合言葉は」

「エキゾチック長島」

振り向くと、康由紀きゆうすけがいた。

「本物の雄一はそんなことは言わない！」

と、僕にDDTを仕掛けてきたが、僕自身はどうみたって本物なんだから仕方がない。たまたまテキストに言った言葉にからむんじゃない、心の中でつぶやいておく。

教室では、担任の福浦ふくが教卓ひょうにいた。

「明日は娘の誕生日なんだ」
だからどうした。

福浦に頼まれ、僕と康由紀はプリントを取りに行くことになった。
「俺、必ず戻ってくるから」

康由紀はまた変な事を言っている。

職員室に向っていくと、クラス委員長の真由美まゆみにであつた。美人だつていうのはわかるが、やはり相手にされず無視される。あんなに無愛想なのに、どうやってクラス委員の票を勝ち取つたのだろう。
…顔か。

職員室に着いた。

「おう、福浦先生の生徒か」

職員室につくと、小田という名まえの先生がいた。40後半で、頭が薄い。スーツを着ておらず、なぜか緑色の作業着で自分の机で仕事をしていた。教師と言うよりも、用務員に近いんじゃないかというルックスの、おじさん先生だ。ちなみに教科は数学。

「あの、僕たちは福浦先生の机の上にあるプリントを取りにきたんですけど・・・」

「ああ、これね」

小田先生は、福浦先生の机からプリントを取り、康由紀に渡した。なぜか、康由紀の手を包むように。なんか気持ちわりいな。

「あ、どうも先生」

康由紀は嫌な顔ひとつせずにプリントを取る。

教室に戻ると、すでにHRがはじまつたあたりだった。康由紀は

教卓にいる福浦に、プリントを渡す。プリントは、学校から親へのお知らせだった。文化祭があるので、学校に来てくださいだってさ。当たり前のように授業がはじまり、当たり前のように休み、当たり前のようにお昼休み。屋上を使うことは当たり前のようになく、教室で僕は康由紀とぼへーとムダ話をしてすごした。

家に帰ると、母親の貴代子が夕食を作っていた。

「ねえ、今日はしょうが焼きでいいでしょ。ユウ、聞いてるの？」
三石琴乃のような声をした貴代子が、僕が無反応だったのに腹を立てる。別にどっちでもいい。

「わかったー」

母親の料理の腕は、中の上くらいである。まあ食えなくもない。夕飯を朝美に食べさせながら済ますと、部屋に戻る。

「ねーねー、お兄ちゃん部屋に戻るの？ねーねー」

朝美が、ぼくの部屋までついて行くこととするのをとめる。今日はプリ ユアだな。DVDを茶の間のテレビにセットして朝美をテレビ付近に放置。朝美は食い入るようにテレビを見はじめた。

今日は何もないなあ。父さんは夜遅くにしか帰らないだろうけど、別にどうってことない。

QueenのCDをかけて、マンガを見て時々勉強する努力をして、惰眠をむさぼる。途中で、窓からコツンという音がしたけど、気のせいだろうな。

今日も何もない一日が終わった。きつとずっとこんなことが続くのだろうな。

2

電話の呼び出し音が聞えた。いや、メールか。どうやらまた長官からである。今日はどんな指令を受けるのだろうか。

幼馴染の雄一は、まだ寝ている。ケータイに仕掛けた盗聴器から、小さな呼吸音が聞えてくる。メールには「今日も雄一を守ることに」と書かれているだけだった。とりあえず、雄一は目覚ましをセットしない癖があるので、雄一のケータイをクラッキングして、アラームっぽく鳴り響かせることにした。

私の部屋の扉を開けると、平行世界の窓が見える。平行世界の雄一には、一つ年下の妹、朝美がいる。あの女はまた性懲りも無く、平行世界の雄一を起すついでにキスを迫ろうとしている。あの女狐！とはいえ、平行世界でも現在の世界でも、起きる現象はあまり変わらないことがわかつていたので、私が仕掛けたアラームのトラップにより、雄一はあつちの世界でも目覚めた。キスを迫ろうとしていた朝美は、なにやら残念そうな顔をしている。これであの妹の野望を打ち砕けたことになり、私はほっとする。

朝にいろいろな妨害工作、女の子としての準備をしていたら、登校時間ぎりぎりになってしまった。朝食を食べる時間がないまま、学校に向かう。遅刻しそうだ。パンも食べ切れず、口に啜えたまま玄関を飛び出す。またワープゾーンを使おうかと思ひ、近くの電信柱の影にもぐりこむ。

ワープをして、数十分前の世界に戻ると、丁度電信柱から出てきた瞬間を、とある少女に見つかってしまった。急いで、記憶消去のスク립トを脳内で構築し、少女の目を見て感染させる。この機能を使ってしまうと、相手は数分前までの記憶が消し飛び、そのまま卒倒するのだ。そして、過去のルートを検索し、今の3分後に雄一がやってくるのがわかったので、急いで防御スク립トを張る。

「えっと、【固体ナンバー：AA0001】片山雄一。彼が眼の前からくさやまはるひにいる少女、この子は【固体ナンバー：KG2392】唐草山春日からくさやまはるひを見て、助けようとする気が起きない」

「イベント消去実施。【printf：『あー、すみません。なんか人が倒れているんですけど…』】実行。【固体ナンバー：AA0001】片山雄一がこのフィールドに足を踏み入れた瞬間、すべての

出来事は書き換えられる」

3分後、雄一が道から現れて、少女が倒れているのをみてあわてて駆け寄った。だが、フィールド効果によりその行為は消去され、無関心に119番をしていたのを確認して私は先に学校へ向った。スクリプトの実行結果にバグがなければ、おそらくあの少女を助けようとする気持ちさえ消されているはずである。

とはいえ今日も任務の関係上、学校で準備することがあるので、とある人物に足止めしてもらおうことにした。

「副長官！私です」

「なんだ、任務に支障が出たのか」

「はい、このままだと。【固体ナンバー：AA0001】片山雄一の生存に影響がでる恐れがあるため、片山雄一の足止めを教官にお願いしたいのであります」

「そうか、上官に向って命令とは・・・いい度胸だな」

「あなた様が将来のお義母様になりますので、あまり失礼なことをいたくはなかつたのですが、よろしくお願いいたします」

「おい、今の一言は聞き捨てならないぞ！てめえ！」
ツーツー

うしろで雄一は、だれかと電話をはじめた。その相手は間違いなく母親であろう、とにかくこれで準備ができる。

とはいえ、実際の所学校で準備をするようなことはあまりない。むしろ殆どとっさのアドリブで回避していることが多いのだ。ただ、校門前のあの確認だけは怠ってはならず、これだけは準備が必要である。

雄一がやってきた。雄一はいつものごとく下駄箱にある上靴を取り出す。ちなみに今日の朝、雄一の下駄箱に入っていた、ハートマークがついた手紙4枚は、すでに私が燃やしてある。

「定期消去スクリプト実行。【固体ナンバー：AA0001】片山雄一」

と、小さくつぶやき雄一の背後にせまり、一言。

「本物の雄一ならば言えるはずだ。朝の合言葉は」

「エキゾチック長島」

よし、忘れていた。大丈夫だ。

「本物の雄一はそんなことは言わない！」

と、私はDDTを仕掛けて雄一に触る。雄一の匂い、体つき、いろいろなもの、私の体と接触する。ああ、うちの旦那はこの人で決まりだわ……

教室では、担任という任務をこなしている同僚の福浦が教卓で待機していた。福浦は私にアイコンタクトを取った。

（おい、ちゃんと確認したんだろうな）

（もちろん）

（じゃあ実行するぞ）

「明日は娘の誕生日なんだ」

福浦が言語スク립トを展開する。この言葉により、対象者（雄一）は、一日に起きるあらゆる嫌な事を忘れてしまうというモードになるのだ。

それはもちろん、本人には秘密の事項であるため、カモフラージュとしてプリントを取りに行くことにするのが通例。おそらく雄一は、この一連の流れが毎日行われている事すら知らない。少女が倒れていたことはイレギュラーではあったが。

「俺、必ず戻ってくるから」

何が起きるかわからない。ここがすでに神と悪魔の戦闘領域にあるため、生徒に扮した悪魔が雄一をいつ攻撃するかわからないのだ。もし私が倒れてしまったら、別の人間が雄一の護衛にあたらなければならぬ。それは絶対にいやだ。私はいつまでも雄一とともにいるんだ。

職員室に向っていくと、クラス委員長の真由美にであった。真由美は目にも止まらぬスピードで左手を上げ、瞬間、時を止めた。

「あなたね、また」

「真由美、あんたが悪魔の巫女だからって、容赦しないわよ」

「言つてなさい。雄一は私の伴侶になるのだから」

「雄一は神の領域に行く男なの。私の旦那よ」

「そんなこと雄一が決めることだわ」

実は、真由美は時をつかさどる上級悪魔に位置づけられる。かつてこの世界に住んでいた本物の真由美と融合し、“転回点”にいる雄一の存在を抹消しようとする世界にやってきたが、雄一のやさしさに触れて今に至る。よくある話かしらね。まああのときは、私の方で防御対策がとれなかったのが原因だけだ。

「はいとこあんたがいなくなってくればいいのよ」

と、真由美が右手から大きな鎌を出現させる。私も左手から巨大なランスをもち、鎌の攻撃を食い止める。

ギャン、ギリイ、ググツ

廊下を突き破り、屋上のさらに上、上空で私と真由美は相対した。ふいに真由美が鎌を振り上げる。上から下、下から上へと攻撃が続く。わたしもそれに応じてランスを使い防いでいく。私が前からランスを突く瞬間、真由美が消え、真後ろから鎌で狙われる。かと思えば、鎌を手から離す。チャンスと思い、前を突進すると下から福浦の声。

「由紀！上だ！」

鎌を手放したと思いきや、それはブーメランのように軌道に乗って私めがけて襲い掛かってきた。私は身動きがとれない。真由美が金縛りにかけているのだ。つやばい！

「解除スクリプト申請。【固体ナンバー：DH0237】村上真由美。不純物を体から取り除く」

私が悪魔と人間を分離するようにスクリプトを実行。すると彼女の動きが鈍くなる。いくら悪魔だとしても、もとは人間だ。人間と共有していることにより、自然と力には制限がかけられる。そのため、金縛りのスクリプトにおいても、人間である『真由美』の体と波長があっていないと実行不可能なのだ。

金縛りが解ける、それと同時に鎌も消滅する。真由美は私の『ウィルス』を解除するために防御のルーンを左手に描きだす。

「ちい。そんなスク립トも使えていたなんて知らなかったわ。仕方ない。今日も雄一はあなたに預けて置くわ」

そういうと、真由美はもとの廊下に降りた。私も急いで雄一の隣に向う。そして時が動き出し、雄一は何食わぬ顔で真由美の横を通り過ぎようとする。

ちなみに屋上まで穴を開けた天井は、再構築スク립トによって、福浦他、同僚たちが修復に当たっている。雄一が天井を見ないようにスク립トをかけたため、ひとまず安心。ただ雄一の視線が、真由美に釘付けなのが気に入らないけど。

そんなわけで、職員室に着いた。

「おう、福浦先生の生徒か」

職員室につくと、小田という名まえの先生がいた。実は小田という名まえではなく、本当は**葎崎**という悪魔側の人間だ。体に置いても、内部に小さな女の子が入っていて、このむさい男の操縦をしているのだ。

「あの、僕たちは福浦先生の机の上にあるプリントを取りにきたんですけど・・・」

雄一が言う。

「ああ、これね」

葎崎は渡した。葎崎は、私の手を握り、かんたんなルーンを刻んで、私の脳内にメッセージを送る。メッセージの意味は『いつまでも秘密を守ることが出来ると思うなよ』、なんていってやがる。

「あ、どうも先生」

とにかく微笑んでやるう。お前らの思う通りにさせないぞ。

教室に戻ると、すでにHRがはじまったあたりだった。康由紀は教卓にいる福浦に、プリントを渡す。プリントは、親向けに人払いのルーンがほり込まれているだけである。ちなみにこの人払いは、

この学校を戦闘領域にするのにあたり、一定期間の間、外部の人間が学校に入らないようにした防御策である。もちろんこれは、神軍と悪魔軍との取り決めで決まっている規定事項なのだ。だが、何も知らない生徒からしたら、学校から親へのお知らせというものしか見えないだろう。

授業がはじまり、休み時間がやってきて、お昼休みまで、なかなか敵の攻撃を防いだ。クラス委員の真由美も、委員長としての立場なのか、意思なのか、教室にいるときは静かにしたいと思っているらしい。そのため、クラスにいる間は協力関係になる。敵が雄一を襲うたび、真由美が時を止め、私が撃退する。壊れた教室や生徒は、福浦やそのほかのエンジニアが修復させる。そのことの繰り返し。そうして、昼休みになった。ちなみに教室外だと、真由美も敵（主に恋がらみ）になるので、いつものように雄一と昼食をとった。

雄一はようやく家に帰ってくれた。わたしの通常任務はここまで、私も家に戻る。実は、私の家は神軍の18支部の拠点となっている。外から見ると普通の家なのだが、中をくぐると、巨大なシエルターのような構造になっている。最大人員は864人。その中の施設の一つとして対象監視の一室があり、今私はそこで雄一の同行を伺っている。これも重要な仕事の一つである。決してストーカーなどではない。

ちなみに、監視装置としては、雄一の家に設置している盗聴器やいろいろな自動スクリーンがある。それにより家の中の様子はわかるし、そしてなにより副長官が雄一を守ってくれるのでひとまず安心だ。ただ、副長官の貴代子は料理はとびきりダメなので、実は夕食だけは妹の朝美に作らせていたりする。まさか雄一は3歳になる妹が包丁を握って料理をしているなんて夢にも思わないだろう。その対価は、雄一と一緒に御飯を食べること、らしい。未恐ろしい赤ん坊だ。

「ねーねー、お兄ちゃん部屋に戻るの？ねーねー」

盗聴器からそんな声が聞える。子供だからっていい気になりやがって。

しかし雄一は、そのおねだりモードの朝美をオトナな対応で撃退する。さすが雄一。プリ ユアのオープニングがきこえてくる。自称赤ん坊を演技している朝美としては、それに興味をもたないと怪しまれると感じているのか、テレビを食い入るように見つめる。

「さあ、どうだったかな。由紀くん」

「長官、どうもっす」

監視室から、男の声が聞えた。ここの一帯を取り仕切っている神軍のリーダーであり、雄一の育ての親でもある。雄一としては、いつも夜遅い、残業続きのお父さん位にしか見えないだろうけど。

「あいかわらず君も男らしすぎるなあ。まだ雄一に女の子として認められてないんだって？」

「う・・・それは時間が解決するであります」

「そうか、ちょっと熱心すぎるのもいけないんじゃないかな。まあいい。今日の雄一はどうだったのかな」

「雄一はあいかわらずカワイ・・・いえ、あいかわらず平凡な一日でした」

「そうか、それならいいんだ。アイツが『世界』を壊しさえしなければそれでいい」

雄一も知らない能力の一つで、『思う通りに動く世界』というのがあり、私たち神軍が彼を監視し、サポートしている原因でもある。話した言葉はもちろんのこと、ときには深層意識の感情さえ世の中に影響が出るものだから、長官は今日の出来事を心配していたのだろう。似たような能力をもつ『新人類』はそれなりにいるが、雄一はそれを度外視して危険な能力者なのだ。少し思っただけで、世界を滅ぼす力が雄一にはある。

そんなわけで、長官は少し安心した様子で監視室からでた。さて、監視開始だ。

と、雄一の家の敷居に進入して来た奴がいる。だれだ。雄一の部屋に向つて石を投げているその女は…

「真由美…か」

ワープゲートから、真由美の小石（2個目）をはじいて、雄一の家の前に出た。

「また、あんたね。夜中なのに迷惑に思わないの？」

「私は、雄一と、こ、個人的なよ、よば、用があっただけよ。あんたこそ、雄一の護衛なのかストーカーなのかはつきりさせなさいよね」

ブチッ

「夜這つてんじゃねえぞおおおおお、あばずれがああああああああああああ！」

「この変態ストーカーがああああああああああああああああああ！」

こうして今日も私の一日、吾妻康由紀（あきよ）の一日がふけて行く。明日も世界は平穩無事だろうか。

- 終わり -

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7037q/>

さまざまな偶然と必然

2011年2月6日17時55分発行